

社会主義国家の少数民族 (I)

森 田 昌 幸

目	次
1	はじめに
2	対象地域
3	民族概観

1. はじめに

社会主義、特に共産主義へ移行するための前段階としての社会主義は、インターナショナリズムを特徴の第一にあげることが可能である。すなわち、民族と民族との間の壁がとりのぞかれた世界である。そのような世界の実現を旨とする政治体制のもとにある社会主義国家において、少数民族問題が理論的にも、政策的にも、如何なる情勢にあるかを理解せんとするのが、本論文の目的である。自由主義国家においては、少数民族問題は民族自治政策のもとに、一応理解することが出来る。しかし、社会主義国家においては、民族自治という簡単な政策では解決出来ない問題が山積しているはずである。例えば、中華人民共和国におけるチベット問題などは、社会主義国家における少数民族問題の典型である。社会主義より共産主義への発展を旨とする国家において、少数民族問題を民族自治政策で簡単にかたずけるならば、インターナショナリズムの否定であり、その社会主義あるいは共産主義イデオロギーも空洞化せざるを得ないであろう。

一般に、ある地域における民族の動向を研究する方法として、その民族を基盤として成立した国家を対象とし、その国家が他の国家と如何なる関係を維持

し、発展させて行くかを歴史的に追跡調査するという研究態度がある。その民族がまだ統一国家を形成するまでに成長していない時は、国家形成への動向に視点があてられる。そして、ひとつの民族国家が成立すると、対内的には、その国家を統一する政治権力をめぐる闘争に焦点があてられ、対外的には、国家権力と国家権力との衝突としてこれをとらえるという形で、民族に対する研究が政治史の分野において行なわれてきたのである。この研究方法は人類が集団を形成して生存するようになって以来、最も重要な関心事のひとつであった政治権力を中心に歴史が述べられるという点において、きわめて優れたものであると思われる。特に、他民族との関係を、国家権力と国家権力との衝突としてとらえることが出来るのは、民族の動向を予測する場合に、ひとつの象徴のもとに考えることが可能となり便利である。例えば、イギリスという民族国家の動向を予測する場合に、その外交は非常に巧妙であるとか、冷静かつ現実的であるとかいうのがそれである。民族の特質がその国家の対外政策の特徴と一致する所以である。何故に巧妙であるのか、冷静かつ現実的であるのかは一般に問われない。

民族と民族が国家権力の衝突という形で接触した場合、その国家権力を形成するものは、有形無形のものに合わせて数限りなくあるであろう。例えば、技術がある。西欧には西欧の技術があり、アジアにはアジアの技術がある。この技術は多くの武器を生み出すであろう。それぞれ、その民族固有の技術による固有の武器をもって、民族と民族の抗争が展開されて、人類は今日にいたったのである。勿論、その間に技術と技術の交流による武器の発達が見られ、たがいに同一の技術によって製作された武器により、戦争が行なわれるようになったのが近代の特徴である。さらに、この武器を作り出した技術は、自然科学的な知識の蓄積によって可能となるのである。この知識も、ただ漠然と蓄積されたものではない。その背景には合理的なものの見方、考え方があったのである。この合理精神によって、人類は科学的な知識を蓄積してきたのである。現在からさかのぼって、この合理精神の発達史をみるならば、それは西欧において顕著であったといえよう。人類はまず西欧において、合理主義的なものの見

方を経験したといわれている。これがデカルト、ロック、カントにいたり、一応の体系化をみたのである。

この合理的な思考様式が西欧を特徴づけたことは、一般に認められているところである。では、この西欧の合理主義が如何なる要因に基づくものであるか、ということが問題となってくる。一般には、合理主義は資本制生産様式で行なわれている社会における商品と労働の相互関係から導びき出されるものとされている。生産様式が人間の思考方法に大きな影響を与えることも、一般に認められているところである。しかし、生産様式もやはり、人類の知識の現象のひとつにすぎない。そうするならば、人間の行動を決定するものは、表面上は物質的なものであるが、最終的には精神的なものである、ということになるであろう。合理的なものの見方の背景に、より精神的なものが内在していると考えられる。

このように、国家権力の対外的発動も、その源泉をさぐれば、生産様式ではなく、精神的なものによって影響されているのである。問題はこの不明確な精神的なものが、何によって形成されているか、ということである。人類は、その発生の時までさかのぼって考えてみるならば、如何にして食物を獲得するかが、まず第一の仕事であった。その方法は植物の採集であり、動物の屠殺であった。そして、その食物の獲得が如何なる方法によって行なわれたか、が重要なのである。この生存のための絶対的必要条件の充足にあたって、人間が行なう諸々の行為の歴史をまず知らなければ、その民族の特徴を知ることは困難である。一例をあげるならば、狩猟民族と農耕民族とを比較した場合、前者は野獣を食糧として捕獲するだけにすぎないが、後者はさらにこれを家畜として飼育⁽¹⁾することが可能である。それ故、国家の歴史ではなく、国家及び民族を構成する本質的なものが何であるかを究明しようとするならば、どうしても民族の文明の研究から始めなければならないのである。国家が文明を創造するのではなく、文明が国家を組織せしめた、という見解に立つことも可能である。

ここでは、人間の思考様式に多大の影響を与えてきた自然について考えてみることにする。それはいうまでもなく食生活に始り、地理的条件、気候、風土

を通じて、そこに生存した人間の歴史をふり返ってみることである。ここで考察している学問分野は、これまで述べてきたような見地から、単なる国家の歴史を述するというのではなく、国家、民族に内在する本質的なものが、きわめて身近かな要因で形成されて行った、という見方に立って、文明発祥の地域たるソヴィエト連邦内部の西方を対象としている。元来、文明はアジアにおいて誕生したといわれている。

アジアの民族がどのような自然の中であって、如何なる方法で生命を永続させ、民族の発展を計ってきたのであろうか。これから、この問題に取り組む場合には、今まで述べてきたような方法をとることにする。ソヴィエト連邦内の少数民族、それはヨーロッパ人ではなく、むしろアジア人に近いのであるが、この民族の人類発展に与えた影響は、決して小さいものではなかった。ここでは現在かなり特異な存在のもとにあるソヴィエト連邦内の少数民族を、社会主義政治権力のもとにおける民族政策を意識しつつ、考察の対象としたい。

2. 対象地域

ソヴィエト連邦内における少数民族として、本稿において対象とするものは、地理的にはヨーロッパ・ロシアの南部でヒマラヤ山脈の西方、アフガニスタンの北に現存する。すなわち、今日のソヴィエト連邦の各共和国を構成している民族で、カザフ (Kazakh)、キルギス (Kirgiz)、タジク (Tadzhik)、ウズベク (Uzbek)、トルクメン (Turkmen)、アゼルバイジャン (Azerbaijan)、グルジア (Georgia)、アルメニア (Armenia) の八つの共和国がそれである。勿論、これ以外にも多数の少数民族が存在するのであるが、それらはまだ独立の政治権力を樹立するほど強力なものではないので、ここではこの八つの民族に限ることにする。

カザフ共和国は主として、カザフ人によって構成されている。このカザフ人というのは、本来はトルコ系の民族である。カザフの意味するところは、冒険主義者といったところである。キルギス共和国はキルギス人が全体の40%以上を占め、このキルギス人というのは、もともと中央アジアの遊牧民であった。

現在では、アーリア系の一派とみなされている。その文字がトルコ系であるのは、匈奴などの支配を受けたためであるといわれる。タジク共和国はバクトリア人を祖先としていることが、今日のところ大体知られている。アラブ人、トルコ人その他に支配され、近代においてはロシア人の支配を受けていた民族である。ウズベク共和国は全体の70%以上がウズベク人で、もともとトルコ系の民族である。その他には、イラン人の血もまじっているとみられている。トルクメン共和国は人口のおよそ半分がトルクメン人であるが、このトルクメン人というのはイラン、フィン、セルジュック族などの長年にわたる混血である。元来は遊牧の民であった。アゼルバイジャン共和国はアルバニア人、ハザル人、チュルク人などの混合である。もともと、タタールの征服によって出来た民族混合体である。現在では、ソヴィエト連邦とイランとの二つに、民族が分かれている。アゼルバイジャン族にも、トルコの影響が強い。グルジア共和国は古代から中世、近代にかけて、ペルシア、アラビア、セルジュック・トルコ、ロシアなどの支配を受け、民族の構成は非常に複雑である。言語上はカフカズ語族に属している。アルメニア共和国は人口の85%以上がアルメニア人で、インド・ヨーロッパ語族に属している。その他には、ロシアの影響の強い民族も、アルメニアの一部を構成している。

以上でわかる通り、まず民族の構成が複雑である。各々に共通していることは、トルコの影響が何らかの形で作用しているということである。その意味で、ロシアや東ヨーロッパの一部の民族と共通のものをもっているようにも考えられる。つまり、ロシアがアジア的支配を受けたのと同様の影響である。現在のソ連や東欧は、もともとロシア人やスラブ人の住んでいた地域とみなしてもそれほど誤りはないが、西アジアやカザフ地方には、ロシア人は住んでいなかった。これらの地域には、18世紀から19世紀にかけて、トルコの勢力が衰えるにつれて、支配者の地位交代が生じ、ロシアが進出するところとなり、ロシア帝国の領土の一部に組み入れられたのである。この状態がソヴィエト・ロシアになっても継続され、今日におよんでいる次第である。各々の民族には、それぞれ伝統的なものがあり、いわゆるナショナリズムの動きも見られないこと

はない。共通するところは、ヨーロッパ・ロシアの各共和国に比して、経済的なおくれが目立つ点である。この経済的後進性は、共産主義を受け入れる下地となるのに十分であったと考えられる。これらの民族が、共産主義を近代化の過程におけるひとつの手段として、受けとめるならば、ある程度目的は達成されるであろう。しかし、そのイデオロギー面において、民族の発展を阻害するような作用を無視することは出来ない。

そのほかに、各民族に共通するものとしては、宗教が考えられるが、宗教は大体においてイスラム教が多い。キリスト教はアルメニアとグルジアの2国だけである。またヨーロッパ・ロシアとは生活面において多分に異なり、従って、その文化もまた異なるのである。気候も夏は乾燥、冬は凍結というのが、ソヴィエト連邦南部における特徴である。

アゼルバイジャンでは、冬は大体零度以下の気温である。そのほかも、およそこのような状態である。地理上の位置はカフカズ山脈によって、ヨーロッパ・ロシアとは完全に断絶している。この山脈は高い所で4,000メートルを越えている。アゼルバイジャンはその東方において、カスピ海に面している。大陸特有の気候の影響で、国土は主として岩石が露出したまま広がっている所がかなりある。また、国の西方においては、アルメニアとイランに接している。カフカズ山脈に源流を発するアラクス川によって、国土の中央が貫通されている。アゼルバイジャンの国土はおよそ、日本本土の半分であるが、人口は400万⁽²⁾ほどである、カスピ海には面しているが、太洋に出口をもたない国である。夏にはイラン方面から乾燥した暑い熱風が吹きこんでくるため、農作物の栽培が困難となる。この、いわゆる乾熱風のため、灌漑が絶対必要な条件になっている。カスピ海沿岸のアラクス川のデルタでは、逆に水害になやむといった状態であった。アゼルバイジャンの自然は、このようにきびしいものであるが、現在ではただひとつ、めぐまれた条件があるとすれば、それはバクーの石油である。バクーはアゼルバイジャンの最も低地にあり、バクー及びカスピ海岸に相当大きい埋蔵量をもっている。生産高は2,500万トンである。バクーの石油は、アゼルバイジャンのきびしい自然の中では、幸運な資産のひとつであろう。全

体として、国土の半分以上が高地であるため、農作物の栽培はむずかしい。従って、原綿が主たる産物である。アゼルバイジャンの地理、気候は多分に乾燥した大陸的なものに属するといえよう。それ故、その住民が気候、風土から受ける影響にも、多分に大陸的なものがあるといえよう。

グルジアとアルメニアは、アゼルバイジャンの西北、黒海の東側にある小国である。特に、グルジアはソヴィエト連邦内でも、比較的恵まれた地方に位する。まず、年間を通じて降水量の多いことが農作物、特に果実の育成を助けている。気温も夏と冬で、それほど大きな差はない。やはり、アゼルバイジャンと同様、カフカズ山脈によって、ヨーロッパ・ロシアと断絶されている。現在の国土はおよそ日本の五分之一であり、人口は約400万⁽³⁾ほどである。グルジアでは、石油はあまり産出しないが、その代わりマンガンの埋蔵量が多大である。グルジアのマンガンがソヴィエト経済に貢献⁽⁴⁾したところは、非常に大きいものがある。

アルメニアはアゼルバイジャンの西、グルジアの南に位する小国で、面積3万平方キロ、人口200万である。この国は非常に高い山岳からなっており、標高は500メートル以上が大部分を占めている。しかも、そのほとんどが火山質である。やはり、乾燥と酷暑の夏、酷寒の冬である。降雨量が非常に少ないために、山岳地帯にわずかに木材資源をみるにすぎない。気温差は60度にもおよぶ地域もある。土地は火山灰が主成分を占めているが、比較的よく肥えていて、農業国である。地下資源は、わずかに銅を産出する。アルメニアはカスピ海にも、黒海にも面していない。

ウズベク、トルクメンの2国はカスピ海の東に位し、比較的平野部が多い。ウズベクは天山山脈とパミール高原の西方、アラル海までの平野にある。国土の面積は日本本土よりもやや広く、人口はおよそ800万である。よく肥えた土地を利用し、農業国として栄えてきている。原綿、家畜、果実などが経済の基盤をささえている。そのほかに、最近ではブクハラ(Bukhara)の近くで、天然ガス⁽⁵⁾の採取が開始され、重要なエネルギー源となっている。

トルクメンは面積およそ48万平方キロ、人口160万の小国である。西方にお

いてカスピ海に接し、東側はアラル海にそそぐアム・ダリア (Amu Dalya) によって、ウズベクと国境を接している。国土は全体として平地である。もっとも、カラ・クム砂漠が国土の大半を占めているため、農業はそれほど発達していない。地下資源はカスピ海側のクラスノボーツクにおいて、石油の産出をみる事が出来る。そのほかには、原綿、果実などがわずかに期待されている。しかし、アラル海からのトルクメン運河の完成で、カラ・クム砂漠を灌漑して行く以外には、農産物の増収の見込みはない。

カザフ、キルギス、タジクはこれまでみてきた各共和国よりも、中央アジアよりの国である。グルジア、アルメニアがトルコと国境を接した国であり、アゼルバイジャン、ウズベク、トルクメンがイラン、アフガニスタンと接しているのに対して、カザフ、キルギス、タジクは中華人民共和国に近い国である。

カザフは東西南北をアルタイ山脈、カスピ海、天山山脈、ウラル山脈にかこまれるような位置にある共和国である。面積280万平方キロ、日本の7倍以上、ソヴィエト連邦内ではロシア共和国に次いで大きい共和国である。人口はおおよそ1千万である。ウラル、アルタイ、天山山脈方面を除けば、国土の大半は平原である。またアム・ダリア、シル・ダリア、イリなどの大河川が国内を貫通しているため、水資源は豊富である。気候は大陸的で、夏冬の温度差は40度近くもある。例えば、セミパラチンスクの8月と1月の平均気温は、19.6度とマイナス16.0度である。地下資源は比較的豊富で石炭⁽⁶⁾、鉄鉱石、銅、マンガン、ニッケル、ボーキサイト、クロームなどが埋蔵されているといわれている。また天山山脈地方へ行くと、バルハシ湖の西に砂漠ステップが展開している。この地域は羊の放し飼いが行なわれている。今日では、カザフ人に比して、移住によるロシア人の人口増加が目立っている。

キルギスは天山、パミール山脈が西方にのびた地方で、これらの山脈の一部によって構成された山岳地帯にある。国内には4、5千メートルから7千メートルにいたる高山がそびえていて、万年雪におおわれている。キルギス人はもともと、カラ・キルギス (Kara Kirgiz) と呼ばれる中央アジア⁽⁷⁾の民族である。面積および20万平方キロ、人口は約200万である。

タジクはキルギスの南に位置し、やはり山岳地帯が大部分を占めており、パミール高原の北に位する国である。低地はほとんどないが、低地では夏の乾燥期が長く、半年以上が乾燥状態である。また高地ではこれと反対に、冬が長く、1年の大半は零度以下である。面積およそ14万平方キロ、人口は約210万⁽⁸⁾である。国土の大半は砂漠と山岳ステップである。

3. 民族概観

これまでみてきた8つの共和国は、それぞれ単一民族の国家ではない。例えば、キルギスはキルギス人だけの国家ではない。キルギス人がおよそ40%⁽⁹⁾で、あとはロシア人、ウクライナ人、ウズベク人などである。しかも、このキルギス人というのが古い多民族の混合によっているのであって、原キルギス人の由来については、現在では明確に判明していないが、カラ・キルギスと呼ばれる種族が存在していた。しかし、この祖先をさぐって行くことは、なかなか困難である。ここでは、ソヴィエト連邦内における非ロシア人、すなわち歴史的にトルコの影響⁽¹⁰⁾を何らかの形で受け、宗教的にはイスラムであり、しかもヨーロッパ・ロシアとは人種的に異質である、という共通の基盤に立脚して、各民族のあゆみをみることにする。各共和国の異民族については、問題をあまりにも複雑とするため、ここではふれず、またの機会にゆずる。

まず、カザフ人であるが、これはもともとウズベクと同一民族であり、ウズベクとの分離は15世紀半ば以降である。ウズベクの名称は14世紀半ばに、キプチャク汗国を支配した汗に由来するといわれている。1465年頃、ウズベクの勢力衰退にともなって、カザフが抬頭してきた。カザフは初めのうち、現在のアルマタからバルハン湖の中間附近で遊牧生活を送っていた。これがウズベクの衰退につれて、独立して行動するようになり、キルギス方面へ移住して、ひとつの民族を形成するにいたったのである。因みに、カザフという名称は、本来「冒険者」あるいは「分裂した民族」の意味である。民族の統率者はスルタンと呼ばれ、その支配権は絶大であった。カザフ語というのは、トルコ語のカザフ方言である。19世紀にカザフ人を征服したロシア人は、これをカイザー

ク⁴⁴と呼ぶ。宗教はイスラム教で、スンニ派⁴⁵である。文字はアラビア文字の分派であったが、ソヴィエト・ロシアになってからはロシア語を使用するようになった。支配者スルタンは家畜の大所有者であり、財産私有制が早くから確立されていた。遊牧民族であるから、土地の私有制といったものはみられなかった。人種的にはトルコよりもむしろモンゴルに近く、黄色人種で髪は黒である。つまり、もともと中央アジアから西アジアで遊牧生活を送っていた蒙古系の人種がイスラム教の影響でトルコ化し、それが19世紀以降ロシア帝国の南下政策の影響を受けて、その支配下にはいった。それから今日までは、帝政ロシアまたはソヴィエト・ロシアとの関係においてみればよいわけである。

キルギス人はその発生をフィノ・ウゴル族に求めることが出来ると考えられる。これはエニセイ川流域に分布していた種族で、今日のフィンランド人などと同じ種族である。つまり、中央アジアでウラル・アルタイ語系⁴⁶に属し、蒙古の遊牧民の影響を受けて、遊牧民族となったのである。キルギスの名称が記録に現われた最初は、8世紀であるといわれている。今日の蒙古人民共和国内を流れるオルホン川⁴⁷において、8世紀の記録が発見され、この中にキルギスの名がみられる。キルギス人は早くから匈奴、突厥の支配を受けた。特に、トルコ系匈奴の影響で、文字はトルコ系である。中国の古文書によると、キルギス人は目が緑で皮膚は白色、髪は赤であったという。中央アジアの民族ではあるが、人種的には蒙古系ではないと思われる。中国唐代には入貢してその支配を受け、さらに突厥、ウイグル、カラ・キタイ及び蒙古などに支配された。19世紀以降はロシアの支配を受け、今日におよんでいるのである。

ヒンズークシ山脈の北側、バクトリアの地にかけて生存した種族が、今日のタジク人であるといわれている。しかし、タジクという名称が用いられるようになったのは、8世紀になってアラビア人に征服されてからである。11世紀になると、今度はトルコの支配下に入り、やがて13世紀に蒙古の大帝国が起ると、成吉思汗に征服された。19世紀後半になると、やはりロシアの侵入⁴⁸により、その植民地となった。

ウズベク人はかつて、中央アジアの高原の遊牧民族であった。14世紀半ば、

キプチャク汗国の支配者の名によって、ウズベクと呼ばれるようになったといわれる。はっきりしたウズベク人の祖先というものは、わからないが、多分色々な種族の混血によると思われる。キプチャク汗国に支配されていたため、キプチャク・ウズベクを称していた。中央アジア民族の中では、めずらしく多くの分派に分れる傾向にあり、遊牧で生活する一派と、定住して農耕を営む一派とがあった。遊牧は主としてサマルカンド地方の高地を生活の根拠地とし、定住したウズベク人はタシケントなどの平地で生活した。これは今日でもなお続いている現象である。16世紀末、アッバスに征服⁽⁶⁾され、人種的には蒙古系ではなく、トルコ系であり、目は褐色、髪は黒く濃い。性格は戦闘的であるといわれる。

トルクメン人も複雑な人種である。トルクメン語はチュルク系の言語である。トルクメンの先祖はオグズ (Oghuz) までさかのぼることが出来る。オグズとはトルコ系の遊牧民族の一派である。このオグズのイスラム化したものがトルクメンで、10世紀頃といわれている。イスラム教で、スンニ派である。13世紀に蒙古が勃興した時に、成吉思汗に滅ぼされた。14世紀には、チムールの帝国に支配され、16、7世紀はイランの属領となり、19世紀にロシア帝国の植民地となったのである。

アゼルバイジャンという名称が歴史に現われたのは、8世紀以降のことで、それ以前には現在のアゼルバイジャンの地はアルバニアと呼ばれていた。この地には、古来スキフタイが住んでいたといわれる。ここにトルコ系、ペルシア系の諸民族の移住、混血がみられ、結局この混血民族が今日のアゼルバイジャン人の源泉ということになるのである。やはり、アラビアやトルコの支配、征服を受け、9世紀初めには、アラビアとの間に征服戦争が行なわれている。10世紀から12世紀にかけては、グルジアの属領となった。しかし、やがて成吉思汗によって、グルジアと一緒に征服された。16世紀以降になると、トルコ、ペルシアがともに植民地化しようとして企てたが、結局19世紀ロシア・トルコ戦争でロシアの支配するところとなり、今日ではソヴィエト領アゼルバイジャン⁽⁷⁾とイラン領アゼルバイジャンに分割されている。

グルジア人は南カフカズの一民族である。紀元前数世紀に、カフカズ山脈⁽¹⁹⁾の南の地に、存在したいくつかの種族の中から生れたのがグルジア人である。この地は古来民族の抗争がはげしく、ペルシアやアラビアなどに支配され、一時は統一をみたこともあったが、11世紀にはまたトルコの支配下に入った。13世紀の蒙古勃興の時は、やはり成吉思汗に征服され、チムールの帝国の属領となった。19世紀以降は、やはりロシアの支配を受け、革命後もその勢力下⁽²⁰⁾にあり、今日にいたっている。

アルメニア人の先祖は今から2,700年ほど前に、アルメニアの地に住んだアーリア系人種であるといわれている。やはり、この地域の多くの住民の混血によって出来上った民族で、アレキサンダー大王の征服を受け、その文化を吸収した。紀元前1,2世紀頃には、独立したアルメニア王国として栄えたが、ローマの支配を受け、その属州のひとつとなった。ローマの支配を脱して後は、ペルシアに征服され、さらにビザンチン軍の攻撃を受けて支配された。その後、トルコの支配も受けている。13世紀から14世紀にかけては、他の民族と同様に、成吉思汗やチムールの帝国の属領となった。やがて、18世紀から19世紀にかけて、ロシア、トルコなどの勢力争いの場となり、結局ロシア帝国の支配下に入り、革命後もロシアの自治共和国⁽²⁰⁾のひとつとなって今日におよんでいる。

以上が今日のソヴィエト連邦における地理的、民族的概観である。すでに、初めに述べた如く、民族の研究は、かならずしも国家権力のみを中心にしては十分可能ではない。その研究対象は人々の生活全般にわたり、その方法論は文明に対する研究を第一歩としなければならない。ソヴィエト連邦の文明は、その民族の多様性と同様に、きわめて複雑である。しかし、その解明から歴史を見、さらに民族の特性をさぐり、社会主義の民族政策を考察する必要があると考えられる。この研究では、次に、各民族の独立とボルシェヴィキの民族政策との関係を考察する。今日のソヴィエト連邦の社会主義民族政策をさぐる、ひとつの手がかりとしたい。

〔註〕

- (1) アーノルド・J・トインビー, 蠟山, 阿部, 長谷川訳『歴史の研究(全)』社会思想研究会, 昭和31年, 299頁。
- (2) Alec Nove and J. A. Newth, *The Soviet Middle East*, George Allen & Unwin LTD, London, 1967, p. 22.
- (3) *op. cit.*, p. 21.
- (4) *op. cit.*, p. 19.
- (5) *op. cit.*, p. 26.
- (6) *op. cit.*, p. 25.
- (7) *op. cit.*, p. 30.
- (8) Edward Allworth, *Central Asia*, Columbia University Press, New York and London, 1967, p. 96.
- (9) Alec Nove and J. A. Newth, *ibid.*, p. 30.
- (10) *op. cit.*, p. 20.
- (11) *op. cit.*, p. 57.
- (12) アジア経済研究所『中東の近代化とイスラム教』アジア経済研究所, 昭和36年 p. 31.
- (13) Edward Allworth, *ibid.*, p. 63.
- (14) *op. cit.*, pp. 73~78.
- (15) Alec Nove and J. A. Newth, *ibid.*, pp. 27~28.
- (16) 斎藤栄三郎『イスラムの社会思想』明玄書房, 昭和39年, p. 272。
- (17) Nicholas & Riasanovsky, *A History of Russia*, Oxford University Press, New York, 1963, p. 552.
- (18) Pierre George, *Géographie de L'U. R. S. S.* 野田早苗訳『ソビエト連邦の地理』白水社, 昭和40年, p. 116.
- (19) Alec Nove and J. A. Newth, *ibid.*, pp. 114~115.
- (20) *op. cit.*, pp. 114~115.